

# 叙想的時制と叙想的アスペクト

渡邊 淳也

(筑波大学)

時制の機能は、「動詞があらわす事行を時間軸上に位置づけることである」とするのがほとんど公理的な定義として受け入れられている。しかし実は、それとならんで、事行を眺望する視点を時間軸上に位置づけている場合もすくなくない。本発表では、事行を眺望する視点を時間軸上に位置づけている時制の用法を「叙想的時制」とよび、時制のもうひとつの重要な機能と見なす。フランス語の半過去のさまざまな用法のうち、従来の研究では「モダールな用法」とされてきたもののかなりの部分が、叙想的時制の概念を導入することで説明できることを発表のなかで示したい。

一方、アスペクトにも、事態そのものが帯びている性質としての完了相・未完了相とは別に、事態をその内側から眺望するという視点の特徴を反映する「叙想的アスペクト」を認めることができるという主張を本発表であらたに提出したい。さらに、発表中では、叙想的アスペクトと見なすことのできるいくつかの事例も見ておきたい。

最後に、叙想性と未完了アスペクトのあいだに親和性が存在することを確認し、その理由についても考察するとともに、叙想性のよりひろい意味あいとして、視点論、認知モード論との関連づけの可能性を指摘したい。